

芳野懐古（藤井竹外）

古陵の 松柏 天颯に 吼ゆ

山寺 春を 尋ねれば 春 寂寥

眉雪の 老僧 時に 帚くことを 輟め

落花 深き 処 南朝を 説く

古陵松柏吼天颯 山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時輟帚 落花深處説南朝

解説 花見をするつもりで吉野に来たが、花はすでに散り果てており、ただ眉まで白い老僧が、落花を掃く手をやめ、南朝の話をしてくれたのは、感慨の深いものがあつたという体験を纏めた詩。

語釈 ※古陵Ⅱ後醍醐天皇の延元陵。※松柏Ⅱもと柏は「このてがしわ」の意で、ヒノキ科の常緑樹である。※天颯Ⅱ天空に吹く荒い風。※山寺Ⅱ如意輪寺。※尋春Ⅱ春景色をさぐる。※眉雪Ⅱ眉が雪のように白いこと。※南朝Ⅱ後醍醐天皇の吉野遷幸から後村上、長慶をへて後龜山天皇の京都還幸までの吉野朝。

通釈 吉野山の如意輪寺に桜の花見に来たのであるが、寺内の後醍醐天皇の陵のほたりには松と柏が高々と聳え、天空に吹く荒い風が唸り声を立てている。花見る人の影もなく、ひっそりとして物寂しい。ただ眉毛まで雪のように白い老僧があたりを掃いていたが、わが姿をみとめ、帚を掃く手を止め、落花が深く散り敷いているところで、昔の南朝の話の色々物語ってくれた。